

# 思川低地における中世村落の景観

— 下野国都賀郡卒島郷を中心に —

原 田 信 男

## 1. はじめに

関東平野は複雑な地形を有する平野であるが、地形学的に見れば厳密には盆地であり、中央部の埼玉県栗橋付近と南部の東京湾内を中心として、現在でも造盆地運動が行われている。また関東平野には人工的に流路を変えられた利根川をはじめ、複数の大河川が流れるが、武蔵野台地・大宮台地・下総台地などが存在するため、沖積地よりも洪積地の方が多いという特色がある。こうした関東平野には、古くから無数の村落が立地するが、それぞれの地形によって、地域ごとに異なった村落景観が展開し、村々を取り巻く自然環境に応じて村落生活が営まれてきた。

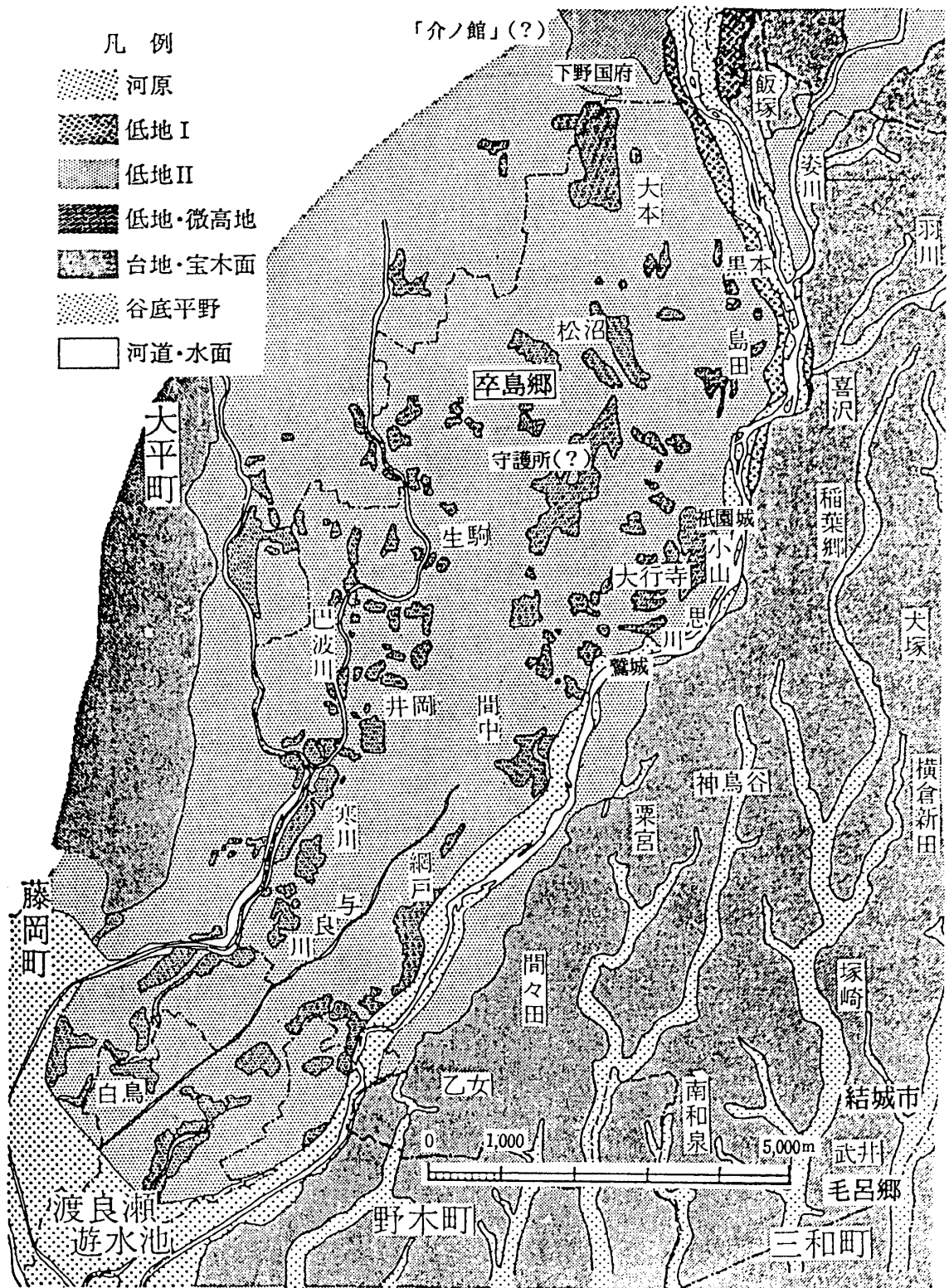
ここ10数年来、筆者はこうした関東平野の中世村落に興味を抱き、主にその東半分の地域をフィールドとして調査を行い、ここに展開する村落景観の類型化を試みた。すなわち、〔A〕山麓湧水地帯 ①山麓型、〔B〕洪積台地湧水地帯 ②深い谷田 ③浅い谷田 (a)広い谷田・b)狭い谷田)、〔C〕沖積低地(悪水)地帯 ④自然堤防型 ⑤人工堤防型、〔D〕洪積台地無湧水地帯 ⑥低台地型、の6類型とし、これがそのまま時系列的な展開過程を辿ることを指摘した<sup>(01)</sup>。しかし、こうした分類は、もともと木村礎先生が主宰された共同研究の下で、主に茨城県西部地域を研究対象としていたため、関東平野東半分といっても、地域的には限定されたままであった。

その後、多少は調査地域を広げたが、基本的には上記の分類を事例的に補強するに止まり、沖積低地湧水地帯の類例については検討を怠ってきた。従って当然ながら、旧稿の分類に対する批判が、峰岸純夫氏によって提起された<sup>(02)</sup>。氏の指摘するように、関東平野全体を見渡す場合には、この類型を避けて通ることは不適切であるので、ここで改めて沖積低地湧水地帯の事例を検討し、その上で中世の村落景観に関する類型化に、若干の修正を施すこととしたい。関東平野北部の思川と巴波川との間の安定的な沖積低地には、湧水を有して乾田化を可能とするような良好な村々が存在する。そこで分析の対象としては、中世に史料の徴証を有し、かつ近世の土地台帳や絵図に恵まれた下野国都賀郡卒島郷を選び、これを素材として具体的な考察を加えたいと思う。

## 2. 卒島郷の立地と概要

下野国都賀郡卒島郷は、現在の栃木県小山市大字・卒島を中心とし、大字・今里を含む地域に比定される中世村落である。この一帯は、西の思川と東の巴波川とに挟まれた沖積低地からなり、その下流南方約7～8キロメートルの地点からは、南に向って渡良瀬湧水地が広がっている。しかし、両者の中流域では、地表下に礫層などが存在するために水吐けは良く、中川水系もしくは鬼怒川水系などとは異なって、乾田を形成し得るような地形条件を有している。図1は、この地域一帯の地形分類図であるが<sup>(03)</sup>、思川東岸の台地部とは大きく異なる低地であることが分かる。しかも卒島郷の南々東わずか10キロメートルほどの地点には、この沖積低地型とは全くの好対照をなす浅い谷田型の典型例である下総国結城郡毛呂郷が位置している<sup>(04)</sup>。ところが、卒島付近は約30メートル前後、沖積低地の北部は約40メートル、南部では約20メートルほどの標高を示し、北部から南部にかけて緩やかな傾斜があり、各所に比較的豊富な湧水点を擁しているため、引水条件にも恵まれて古くから水田を有する村々が多かったことになる。

図1：思川低地の地形



\* 思川低地地形分類図 (『小山市史 通史編 I 自然 原始・古代 中世』より作成)

また、卒島郷が位置する思川水系の沖積低地の周囲は、関東平野のうちでも、良好な地形条件にあり、古代から生活の拠点となっていた。例えば思川東岸の台地上では、特に黒川との合流点以北に、琵琶塚古墳・摩利支天塚古墳など下野有数の巨大古墳群が存在しており、同地点以南においても思川沿いの台地南端部には、実に夥しい数の古墳が立地している。また反対側の巴波川・永野川合流点付近にも、思川東岸に較べれば小規模ではあるものの、下泉愛宕神社古墳のほか下

泉1～6号墳が存在するなど、古墳時代の遺跡が集中している<sup>(05)</sup>。思川水系の沖積地を挟んだ両地域は、すでに古墳時代から盛んに土地利用が行われていたことが分かる。

これらの地域に較べれば、思川水系の沖積低地には遺跡・遺物は少ないが、古い時代における生活の痕跡が全く認められないわけではない。

思川低地一帯は、いわば大間々扇状地の湧水を利用した新田荘に近く、山麓型のような恵まれた地形条件にあったが、やはり河川の沖積地に位置したため、河川による水害は避けられなかった。しかし氾濫原とはいえ、関東平野中央部のような急速な沈降、もしくは大量の堆積を受けたものとは思われない。例えば卒島郷付近でも、郷内の行人塚には古墳期の円墳が存在するほか、北東の大本には中村遺跡・北部の松招には仲ノ内遺跡などの縄文中期の遺跡、小規模ではあるが上石塚には愛宕神社古墳・上国府塚には星宮古墳・下国府塚には天神山古墳・天神山北古墳などがあり、それぞれ遺物が採集されている。これらは、ほぼ同等の標高地に位置するところから、河川による氾濫が繰り返されたとしても、いずれも小規模なもので、縄文から今日に至る間に大きな堆積作用は認められず、地表面の変化はかなり緩やかであった、と考えるとよいだろう。

それゆえ兩岸の地域ほどではないにしても、この沖積低地の安定性は高く、歴史時代に入ると、下野国府や総社大神神社などが、この低地上の湧水点付近に設けられるようになった。『倭名類聚抄』の郷名としては、栃木市国府町付近に都賀郡布多郷が比定されるほか、卒島郷の東南3～4キロメートルの小山市生駒が、同生馬郷の地とされているなど、古くから集落立地に恵まれた地域であった。なかでも下野国における支配の拠点となった国府は、1970年代後半の発掘調査によって、栃木市田村町の字・宮野辺にあったことが明らかとなった。この国衙機構を支えたのが、在庁官人であった小山氏で、藤原秀郷五代目の太田行尊の孫・政光を始祖とする。小山氏は、はじめ下野大掾として入部したが、平安期には下野国司、鎌倉期には下野守護となり、長沼・結城・下妻・寒川などの支族を分出して、下野南部一帯に勢力を振るった。

小山氏は、下野国府を中心とする所領を経済的な基盤としたが、その本領については、寛喜2年(1230)2月20日の小山朝政讓状から知ることができる<sup>(06)</sup>。本文書からは、下野・武蔵・陸奥・尾張・播磨に所領を有し、権大介職を保持して下野国の国衙機構を握る最高実力者となり、加えて国内の寒川御厨(小山荘)のほか、国府郡内に「日向野郷・菅田郷・落嶋郷・古国府・大光寺・国分寺敷地・惣社敷地(同惣社野荒居)・宮目社・大塚野」の地を領有していたことが分かる。このうち寒川御厨つまり小山荘は、思川東岸の地に位置するが、国府郡のうち菅田郷と国分寺敷地を除く地は、巴波川との間の思川水系の沖積地にあたり、かつての下野国府の中心をなす地域であったことになる。

後に国府は一時的に、思川東岸台地部の菅田郷北部の国分寺付近に移ったが、それ以後の国務の中心地については、小山氏の国司館「介ノ館」に移ったとされている。これに関しては、小川信氏と峰岸純夫氏が考察を加えられ、小川氏は先の讓状に見える日向野郷に比定され、栃木市田本の字・上館の地とされた<sup>(07)</sup>。また峰岸氏は、付近に国府・西国府などの地名が残ることから、栃木市大宮の大宮神社付近とされ、さちに後には、国庁と「介ノ館」とを合体させた形で、上国府塚・下国府塚の地に中世の国司館(=守護所)が移動したものと推定されている<sup>(08)</sup>。

なお氏は、この上国府塚・下国府塚と上石塚・下石塚および立木や卒島の字である福富を含む地域を、先の讓状に見える落嶋郷の地とされ、中世小山の中心地と考えられている。さらに、付近の立木には小山氏の氏寺と考えられている万願寺があるほか、この地域一帯からは板碑や蔵骨器などの遺物が多量に出土しており、氏の比定は大筋において承認し得るものと思われる。また下石塚には石塚館があったとされ、上国府塚にも御城の地名が残ることから、ここに国府館があったとされているが<sup>(09)</sup>、該当する遺構の確認はなされていない。もし氏の推論が正しければ、本稿で分析の対象とする卒島郷は、この落嶋郷の北西部に隣接し、中世では重要な地に位置していたことになる。

卒島も先の図1でみれば、思川水系の沖積地のうちの小規模な微高地であったが、確かに上国府塚・下国府塚を中心とした一帯には、より大規模の微高地が発達しており、集落立地の条件としては非常に優れていたことが分かる。いずれにせよ、この思川低地によって主要部分が構成される都賀郡は、古くから下野国の政治の中心地で国府郡とも呼ばれていたが、利根川水系に連なる思川などの河川に加えて、古代の東山道も貫通しており、耕地条件のみならず水陸交通の便にも恵まれた地であった。具体的な耕地の利用については後に詳しく検討するが、ここでは卒島の位置する思川低地は、沖積低地であっても水利の便が良く、二毛作にも適した乾田を擁し得る地域で、関東平野において、極めて良好な地形条件にあったことを指摘しておくに留めたい。

### 3. 中世の卒島郷

卒島郷の史料的初見は比較的新しく、天正5年(1577)10月19日の北条氏照印判状に<sup>(10)</sup>、「以卒嶋郷之内千疋之所被下置候、可知行候」とあり、卒島郷のうち1000疋分の地が大橋播磨守に与えられている。なお大橋播磨守については、下生井村に土着したと思われる人物で、榎本城主の指揮下にあったという<sup>(11)</sup>。次いで同10年(1582)卯月29日の某官途挙状写にも<sup>(12)</sup>、「此度卒島江罷越候而、致辛勞候」と見え、船田某の卒島での働きに対して、官途が与えられている。さらに同13年(1585)8月12日の北条氏虎印判状は<sup>(13)</sup>、「卒島」に対して発布された禁制で、軍勢・甲乙人等の濫妨・狼籍が停止されている。中世史料のうち、「卒島」の文字が見えるのは、この3点の文書のみであるが、この他にも少ないながら、中世村落としての卒島郷の存在を窺わせるものもある。

このうち、先に峰岸氏が中世の蒨嶋郷の内とされた福富は、後に見るように慶長18年(1613)2月の卒島村検地帳では<sup>(14)</sup>、卒島村の一部として扱われており、現在でも卒島の字・福富坪となっている。この福富については、天文5年(1536)11月27日の小山高朝伊勢役銭算用状写に<sup>(15)</sup>、「上郷分」として「一、四貫貳百文 ふくとみ」と見える。本文書は、小山高朝が小山荘すなわち寒河御厨支配の伝統を承け、伊勢役銭を負担した小山領内の村々を書き上げて、伊勢二宮のうち内宮師職であった佐八掃部大夫に提出したもので、ここには卒島郷は登場していない点が注目される。

また、同じく慶長期に卒島村の一部とされた今里は、慶安期には一村扱いとなり現在では大字となっている。しかし文禄4年(1595)2月5日の榎本領二十四村惣高覚には<sup>(16)</sup>、榎本領の一部として「百六拾八石二斗八升五合 今里」とある。今里の田畠については、先の慶長検地帳に、「今里」「今里といのうち」「といのうち今里」などの小字名が見え、これらを合計すると14町5反9畝17歩となり、ほぼ文禄期の村高に近い値となる。今里は文禄期には卒島と別扱いで、文禄の榎本領惣高覚にも卒島村が見えないことから、おそらく卒島と今里とは、それぞれに独自の機構上の要素を有していたものと思われる。

さらに、直接に「卒島」という表現はないが、最も古い史料としては、嘉元元年(1303)以後の成立にかかる『一遍上人縁起』があり<sup>(17)</sup>、一遍の弟子・他阿真教の行状を記した第6段には次のようにある。

同年(永仁5年)六月、下野国小山の新善光寺の如来堂に暫く逗留ありけるに、瑞花ふり、紫雲たなびきて、耳目をおどろかしければ、万人きどくの事に申あへりけるに、ある僧のもとより書て送ける。

一遍の死後に二世となって教団を率いた真教は、門徒と共に北陸に遊行したのち永仁5年(1297)に関東に入り、下野国小山の新善光寺に逗留したが、ここで奇瑞に遭い、布教活動を行った旨が記されている。そして、この新善光寺は現在も卒島にあるが、もとは信濃国善光寺から移ったと伝える天台宗の寺院で、古くから釈迦如来を本尊としていたという。この新善光寺の如来堂に拠って、真教が布教を行ったことから、同寺は時宗の寺院となり、真教を開山とするようになった。

しかも『他阿上人法語』巻第6には、「下野国小山にて塩津入道の念仏の安心たづねまうしけるにつかはさる御返事」なる書簡が収められており<sup>(18)</sup>、他阿真教が「塩津入道」なる武士を信徒としていたことが分かる。ただ、これに関しては『他阿上人歌集』に<sup>(19)</sup>、

下野の小山におはしける時、塩沢入道といふもの身の罪業深きことを嘆きて他力本願のいはれ、念仏往生のことはりなど尋ね申ける返答のおくに書てあたへられし。

とあることや、先の『他阿上人法語』巻第8にも「塩沢入道」が登場するところから、「塩津」は「塩沢」の誤りと考えられている。しかも卒島の南方約5キロメートルの地点には塩沢村（現・小山市塩沢）が存在することから、「塩沢入道」については、この地を本貫とする在地武士で、小山氏と何らかの関連を有し、真教の小山逗留中に帰依したもの、と推定されている<sup>(20)</sup>。

その後に新善光寺は、時宗教団の布教の拠点の一つとなり、近世には栗崎山もしくは紫雲山と号したが、古くは栗崎道場と称していた。現在、新善光寺は卒島の集落の南西部に位置するが、後に詳しく検討するように、かつてはより北西部の「道場」と呼ばれた地にあった、と伝えられている。いずれにせよ新善光寺が、卒島の地内にあったことは確実に、すでに鎌倉期には卒島郷が中世村落として成立していたことを窺わせる。さらに服部英雄氏は、卒島地内の小字「道場」付近に、「御正作」という地名が存在することから、現地調査を踏まえた上で全国的な事例をもとに、これが地頭の直営田を意味する御正作であることを論証されており<sup>(21)</sup>、卒島が鎌倉期以来の中世村落であることに疑いはなからう。

また同じく地内にある西念寺は、宝暦4年(1754)11月の西念寺元由書によれば<sup>(22)</sup>、九条家の出身で亀山天皇・後宇多天皇の戒師を務めた理覚尋慶上人が、延慶元年(1308)正月2日に当地で入寂したので、その門人が弔いのために建立した、と伝える。さらに明治12年(1879)1月の郡村沿革調の村名の由来の項には<sup>(23)</sup>、南北朝の頃に某院三宮が当村の人々の援助を得ながら、地内の小庵に住していたが、これが当地で亡くなったため素島を卒島に改めた、という口碑が留められている。

特に後者は村の鎮守である三宮神社に関連させたもので、前者の伝承を模した可能性も十分に考えられる。いずれにせよ、共に鎌倉末期から南北朝期にかけての徴証が、西念寺と三宮社の所伝に登場することが興味深い。おそらく卒島郷は、鎌倉末期から南北朝期に新たな寺院を加えるなどの展開を見せ、中世村落として一つの画期をなしたものと思われる。なお、これらの寺社に関しても新善光寺同様に、地内での移動という問題があるが、これについては後に村落景観との関連で扱うことにしたい。

沖積低地の小さな微高地上に立地する卒島であるが、ここにも中世城郭が存在していたことを、市村高男氏は地内に残る小字名から想定されている<sup>(24)</sup>。卒島は高低差が1メートルに満たないほどの平坦な地で、遺構と呼ぶべきものは全く残っていないが、現在の卒島の集落中心部付近には、中城・東城・旧曲輪・新曲輪といった字名が残り、その周囲に寺社が集中し町屋という地字も存在することから、ここに中世城郭があったとしても不自然ではない。おそらく卒島城は、先に見たように戦国期の後北条氏関係文書に、「卒島」の地名が登場するようになることから、この時期に築かれた城郭で、その築城は卒島の集村化の契機となったものとも思われるが、これに関しては後に触れたい。

この卒島城に関しては、関連史料はなく性格や規模も不明であるが、卒島を根拠としたと思われる小山氏の家臣については、市村高男氏の同論文によって検討が加えられている。氏は、小山氏の発給文書を初めとする中世史料や、家々の伝承などに基づいた近世文書を用い、両者を突き合わせることで、小山氏家臣団の全貌を明らかにしようと試みた。氏の成果によれば、近世中期に小山氏の旧臣達を書上げた文書には、卒島の旧臣として谷田貝大隅・福田内記・多賀谷修理・大出隼人・船田出雲守・大出藤左衛門・大塚美濃守といった人々が挙げられているといい、このうち船田出雲守については、中世文書で同一人物が確認されるほか、船田外記なる存在も知られ

る。船田氏は祇園城主・小山氏の直接統率下にあった在地土豪であるが、このほか小山氏の有力な家臣であった粟宮氏の一族と考えられる秦左馬助も、中世文書に登場する土豪で、これに関しては卒島郷に土着したという伝承がある<sup>(25)</sup>。卒島郷における土豪の具体的な存在や、その変遷については、史料的に明らかに出来ないが、おそらく、こうした小山氏の指揮下にあった家臣が居住し、在地支配を行っていたと考えてよいだろう。

#### 4. 近世の村落景観

近世の卒島村の村落景観については、稲葉友好家に伝わる地方文書などによって、その考察が可能となる。卒島村は、『旧高田領取調帳』によれば<sup>(26)</sup>、幕末期の村高1,627石余で、旗本久世氏および関宿藩領と下妻藩領に分れていたが、このうち関宿藩領分の名主が稲葉家であり、かつ北接する新善光寺の檀家総代を務めた。同家には、慶長検地帳のほか、多数の絵図類を含む約330点余の近世文書を伝える。この慶長検地帳は本多正純の下で作成され、一部に若干の不明部分はあるが、ほぼ近世初頭の卒島村の全貌を伝える点で貴重な史料となっている。卒島郷の村落景観の復原にあたって、まず検地帳の分析から始めたいと思う。

検地帳の表紙には、「下野国都賀郡小山庄卒島之郷御縄打水帳」とあり、全9冊のうち1冊は屋敷帳で、紙質・筆跡および黒印などから原本と認められる。各冊の日付から、検地は慶長18年(1613)正月28日に始まり、2月15日に終了したことが分かる。村高については記されていないが、反別では田58町2反4畝26歩・畠23町7反1畝3歩、計81町9反5畝29歩となる。なお総筆数は判読可能な分のみで2,736筆、うち屋敷は121筆で計3町4反15歩を数え、全部で55の小字名が登場する。このうちには、先に見たように、近世の今里村(文禄期の村高168石余)と地内の字・福富坪を含んでいるが、ほぼ村高500石前後の近隣の村々からすれば、かなりの大村であった。

この慶長段階の田畠の内訳を総計して整理したのが表1で、水田の合計が畠地のそれを圧倒的に上回り、80パーセントを越える水田率を誇っている。最も多いのは下田であるが、その約半分ほどの中田と約四分の一ほどの上田を擁し、下々田はさらにその上田の約半分ほどで、60パーセント近い下田率を示しているが、全体として水田の内容は決して悪いものではなかった。また畠地においても、最も多いのは中畠で下畠がこれに次ぐが、下々畠よりもはるかに上畠の方が多く、畠地の質もまた概ね良好と評価できよう。すなわち乾田低地型の村落としての卒島郷は、他の諸類型の村々に較べて、関東平野のうちでは、極めて優秀な耕地群を擁しており、下野府中に隣接する郷に相応しい生産力状況にあったことになる。

こうした卒島郷の比較的優秀な水田群は、先に述べたような地形条件によるもので、水田耕作に有利な用排水施設が確保しやすいためであった。関東平野のうちでも山地に近いことから、地表下に礫層の堆積があり、このため水吐けが良いことが乾田化を可能にした条件であった。また用水の確保に関しては、思川や巴波川という河川からの引水の問題もあるが、何よりも沖積低地の各所に存在する豊富な湧水が、この地域の水田開発に大きな役割を果たした。この問題を、卒島郷について見れば、享保3年(1718)6月の卒島村明細帳に<sup>(27)</sup>、

表1：卒島郷田畠内訳表

|         |         |         |         |          |          |       |
|---------|---------|---------|---------|----------|----------|-------|
| 上 田     | 中 田     | 下 田     | 下々田     | 田 計      | 田畠計      | 水田率   |
| 2153.22 | 4094.07 | 8119.01 | 1092.12 | 15458.12 | 19130.11 | 80.81 |
| 上 畠     | 中 畠     | 下 畠     | 下々畠     | 畠 計      | 屋 敷      | 下田率   |
| 962.00  | 1292.23 | 1218.09 | 202.17  | 3671.29  | 340.15   | 59.59 |

\*慶長18年卒島郷検地帳(稲葉家文書)より作成。ただし計算値。

### 一、当村田方用水之事

是ハ当村より壺里、上郷大宮村地内ニ出水御座候て、当村・中仕上村・樋口村・高谷村・北武井村・上初田村・今里村・今泉村・城内村・上国府塚村、以上拾ヶ村之用水ニて前々用水引来申候、

とあり、思川低地北部の大宮村（現・栃木市大宮町）の湧水から、その下流域の村々が共同で引水し、これを利用していたことが分かる。

これは赤淵用水と呼ばれるもので、先に峰岸氏が国司館「介ノ館」に比定した、大宮神社の西脇にある湧水点を一つの起点としていた。江戸中期の今泉・大宮・中仕上村周辺用水図によれば<sup>(28)</sup>、同所から、今泉村を通り、城内・樋口・北武井・卒島・今里・上国府塚への用水を主流として、城内村への用水、中仕上村への用水2本、樋口・高谷村への用水と、4本の支流を分出させており、卒島村へは樋口村に堰を設けて引水していた。また年月日未詳の用水絵図には<sup>(29)</sup>、これとは別に同じく大宮村から、宮田・樋口・高谷の各村を通して、卒島村に引水する耕明用水も描かれている。さらに前出の卒島村明細帳には、

一、高谷村地内赤井戸出水、当村惣郷ニて反畝歩十町歩余、用水引来申候、

ともあり、北接する高谷村からの湧水も、用水として利用され、10町歩ほどの水田を潤していたことが分かる。

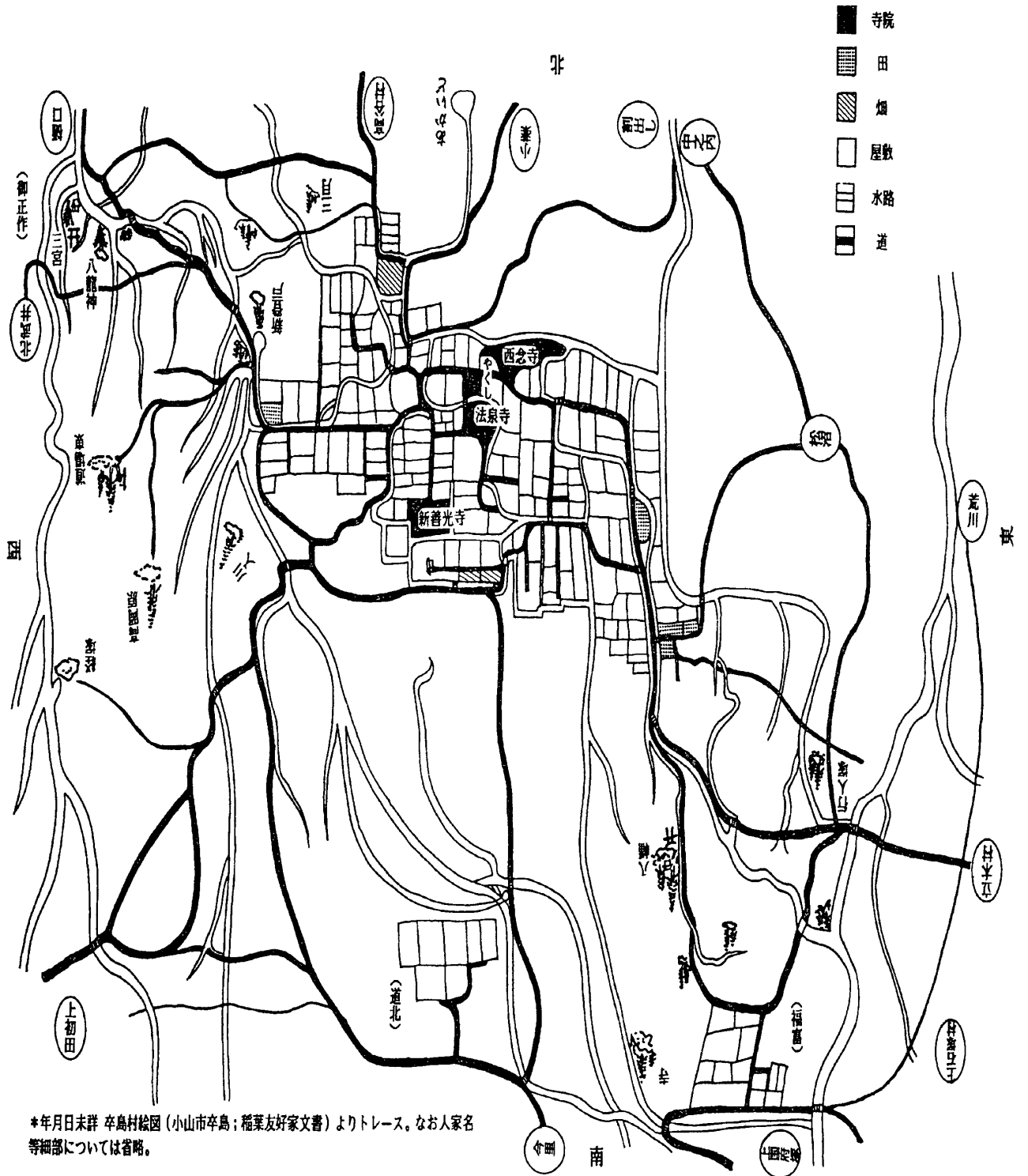
こうした用水と集落の状況については、同じく江戸中後期頃と推定される年月日未詳の卒島村絵図に詳しいので<sup>(30)</sup>、これをトレースした図2を見てみよう。まず集落としては、現在と同じ位置に塊村状態で密集しており、その南部と東南部に道北と福富という小集落が分布し、周囲に水田を主体とした耕地が広く展開する、という景観をなしている。また集落内部に、新善光寺や西念寺などの寺院も集っているが、三宮神社や八幡神社さらには八竜神、といった神社や祠が周囲の耕地の中に点在していたことが分かる。なお用水は、西方から流入するのが赤淵用水、その東にあり北から入る耕明用水、さらに東に六ヶ村用水があり、これらの用水が網の眼のように張り巡らされていた様子が窺われる。しかも図2の北部には、高谷村地内にある湧水“赤井戸”も書込まれており、用水として利用されていたことが読み取れる。

以上のような近世中後期の卒島村の景観を念頭に置いた上で、再び慶長検地帳から近世初期の村落景観を検討してみよう。慶長検地帳の地字毎の耕地状況を集計したのが表2であり、これらの地字のうち、所在地の判明するもののみを、明治期の地形図に落としたのが図3である<sup>(31)</sup>。まず耕地から見ていけば、上田が比較的多く全体に良質なのは、「沖ノ西・まものうち南・(某所)たかせき・さかさほり」といった耕地で、「今里・谷口・杉ノ西」は上田・中田も多いが、その倍を上回る下田も擁している。前者のうち所在の推定が可能なのは、卒島の集落の北西にある「沖ノ西」と、今里の集落の南に位置する「まものうち南」で、これらは平坦な水田部と考えられる。後者もこれらの周辺に位置するところから、微妙な高低差とこれに伴う水掛りとの関連で、それぞれ水田の地味が異なったものと思われる。今日では耕地整理によって、非常に平坦な水田地帯となっているが、かつては微妙な高低差があり、小規模な微高地が各所に散在していた、と考えるべきだろう。

これらの水田部分とは逆に、ほとんどが畠地である「福富・あら川・みつほり・ほり中こ」といった耕地は、おそらくやや高い微高地と思われ、屋敷を伴うことが多い点が注目されよう。また下田と下々田がほとんどで、かつ下畠や下々畠も多い「西念寺」は、かつての西念寺があった場所で、やや低い微高地が広がっていたことが想像される。

「西念寺」の西方および西南には、「やつりうち(八竜神)・毘沙門堂・道場・経塚」といった地名が残り、これらは中田を含む場合もあるが、大部分が下田もしくは下々田で、必ずしも地味は良好ではなく、かつて寺社などの宗教施設が存在したと推定されることから、やはり微高地となっていた、と見做すことが出来よう。

図2：卒島村絵図



次に集落については、8冊の慶長検地帳のうちの1冊が屋敷のみに宛てられており、121筆を数え3町4反余の屋敷地を有していたことから、すでに図2に見たような集村状況が出現していた、と考えてよいだろう。しかも先に見たように、戦国期には卒島城があり、これを想定せしめる地名が、図2の集落部分に集中することから、卒島城撤廃後に一層の集村化が進んだものと思われる。おそらく戦国末期もしくは近世初頭の比較的早い時期に、現在のような卒島村の集落の原型が成立していたであろう。しかし一方で、「ふくとミ」と「あら川南」に隣接して「屋敷そ



い」という耕地が存在し、畠地などを比較的多く擁しており、これらの地域にも小集落が形成されていたことが窺われる。もちろん福富については、すでに見たように中世においても、一つの村落として把握されており、卒島一帯には今日のような村落景観が近世初頭に出現していたことになる。

## 5. 中世の村落景観

近世の村落景観に関しては、文書や絵図類からの復原が可能であったが、中世についてはほとんど史料はなく、いくつかの材料から推論を重ねていくほかはない。その際に手がかりとなるのは、卒島郷の字名で、特に慶長検地帳に見える「西念寺・やつりうち（八竜神）・毘沙門堂・道場・経塚」はもちろん、「三ノ宮・御正作（ミソザク）」といった宗教施設などに関わる地名群である。これらは先に見たように、すでに近世初頭に耕地化しており、現在の卒島の集落には、字・西念寺にあった西念寺、字・道場にあった新善光寺が移動して来ているが、かつては地内北西部の微高地にあったことは確実で、その時期は中世ということになる。

なかでも「御正作」については、先に紹介した服部英雄氏の説によれば、地頭の直営田で最も水田としての地味の良いところに設定されたという<sup>(32)</sup>。慶長の検地帳には「御正作」の地名は見えないが、小字名としては今日まで伝わり、図3に示したように「八竜神」と「三の宮」の西に位置する地であった。表2では「八竜神」の耕地は良好ではないが、こうした乾田低地では用排水路の設定如何によって地味が異なるため、近世と中世の耕地状況の比較を単純には行い得ない、という難点がある。

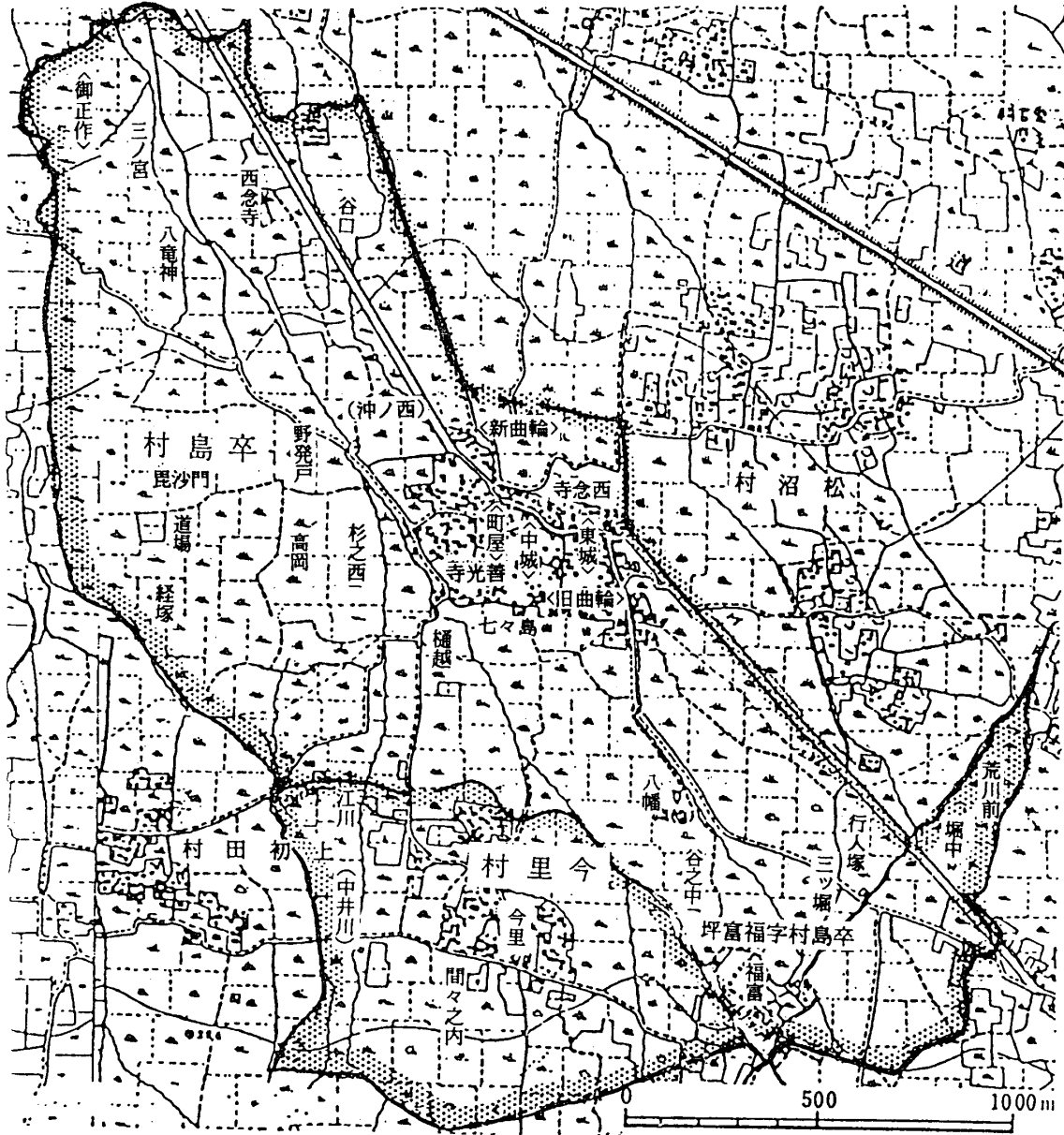
用排水路の規模や設定状況は、時代によって異なるが、少なくとも「御正作」の地が良好な水田であったとするなら、遅くとも鎌倉後期には、赤淵用水の原型が、すでに成立していなければならなかったことになる。江戸期の赤淵用水は、その水がかり範囲から見て、およそ12~15キロメートルほどの用水であったろうが、中世小山氏の実力を以てすれば、旧稿で指摘したような鎌倉期の用水工事の規模や人工堤防の存在からしても<sup>(33)</sup>、十分に可能な工事であったに違いない。もちろん、それ以前においては、図2に記されたような高谷村の湧水・赤井戸を利用して、小規模な水田を営む程度のものであったろうが、そうした状況はすでに中世には克服されていたものと思われる。おそらく思川低地北部の湧水点から引いた用水によっていたため、用排水路を設置し得た部分のみが水田化され、微妙な高低差を残したまま、そこに畠地などが設けられて、小規模な集落が散在的に営まれていたのだ、と考えてよいだろう。

おそらく中世の卒島郷では、「御正作」の地を中心として、これらの宗教施設に関わる地名群の残る旧微高地上に、小規模な集落があり、服部氏が指摘するような散村的な状況を呈していたであろう。もちろん現在の卒島の集落が載る微高地にも小集落があり、その後ここに卒島城が築かれ、その廃絶に伴って近世的な集村化が完成を見たものと考えてよいだろう。このほか先にも述べたように、福富や今里の自立性が高いことや、慶長検地帳の「あら川南」付近にも屋敷地が認められることから、①「御正作」や宗教施設関連地名の地、②現在の卒島集落の地、③福富の地、④今里の地、⑤「あら川南」の地などに小集落が設定されており、散村的な村落景観を構成していたものと思われる。

なお、この「御正作」がいつの時点のものか不明確であるが、遅くとも鎌倉後期には遡るであろう。おそらく小山氏の主導と推定される用排水路の設置と関わるが、新善光寺の存在は、そうした開発を前提としたものと考えなければなるまい。卒島郷は、初めは「御正作」や「道場」の地を中心として、散村的な状況を呈していたが、やがて鎌倉末期から南北朝期にかけて、村落としても次第に展開を見せ始めたものと思われる。先の三宮神社や西念寺の成立伝承として残るの



図3：卒島村の地形と地字



\*卒島村・今里地形図（『小山市史 史料編 原始・古代』歴史地理資料）より作成。

なお（ ）は推定によるもので、〈 〉は参考地名。

慶長検地の際に作成されたという形を採る、3月19日付の村草分年寄長百姓書上には<sup>(34)</sup>、草分けと称する8名のほか、上層農民的な名前を有する23名の農民名が記されているが、このうち草分け筆頭の「稲葉和泉」は、先にも見たように関宿藩領分の名主と新善光寺の惣代を務める家であった。この稲葉家には、「応永家士禄<sup>ママ</sup>」なる偽文書が伝わるが<sup>(35)</sup>、これには「稲葉勘解由」なる人物が足利直義の病気を直し、その息子の「又左衛門」が田畠を開き家を築いた「開発主」である旨が記されている。もちろん内容自体は信ずるに足りないが、この「又左衛門」の享年が応永11年(1404)となっている点が興味深い。ここでも現在に伝わる薬師堂は、この時に「稲葉勘解由」の供養として建立されたことになっている。

いずれにしても、古くから卒島郷に存在した、三宮神社・西念寺・薬師堂に関わる成立伝承が、ほとんど南北朝前後の時期に集中することは、単なる偶然とは思われない。おそらく、こうした

表 3：思川低地村々耕地表

| 地区   | 村名    | 年次   | 西暦       | 田        |         | 畠       |          | 合計       |       | 水田率   | 下田率   |
|------|-------|------|----------|----------|---------|---------|----------|----------|-------|-------|-------|
| 栃木地区 | 国府村   | 慶長17 | 1612     | 472.00   | —       | 5504.06 | —        | 5976.06  | —     | 7.90  | 22.25 |
|      | 田村    | 慶長17 | 1612     | 405.24   | —       | 5341.13 | —        | 5846.07  | —     | 6.93  | 1.23  |
|      | 寄居村   | 寛文2  | 1662     | 1356.18  | —       | 8735.02 | —        | 10091.20 | —     | 13.44 | 37.68 |
| 小山地区 | 下国府塚村 | 慶長18 | 1613     | 8445.11  | 100     | 1762.28 | 100      | 10208.09 | 100   | 82.79 | 53.61 |
|      |       | 正徳5  | 1715     | 8466.25  | 100     | 2161.26 | 123      | 10628.11 | 104   | 79.66 | 54.23 |
|      | 下石塚村  | 慶長18 | 1613     | 5824.26  | —       | 2371.03 | —        | 8195.29  | —     | 71.07 | 49.09 |
|      | 初田村   | 慶長18 | 1613     | 6968.29  | 100     | 2278.13 | 100      | 9247.12  | 100   | 73.35 | 54.88 |
|      |       | 元和元  | 1615     | 9880.04  | 142     | 3116.29 | 137      | 12997.03 | 141   | 76.02 | 50.16 |
|      | 卒島村   | 慶長18 | 1613     | 15633.05 | 100     | 4188.15 | 100      | 19821.27 | 100   | 78.87 | 59.08 |
|      |       | 元和9  | 1623     | 15967.25 | 102     | 4265.23 | 102      | 20233.18 | 102   | 78.92 | 44.02 |
| 寛文4  |       | 1664 | 16338.15 | 105      | 4820.09 | 115     | 21158.24 | 107      | 77.22 | 46.43 |       |

\*単位は畝・歩（『栃木市史 資料編』『小山市史 史料編 近世1』『下野国近世初期文書集成 第1巻』および小山市立博物館所蔵文書より作成）

伝承は、中世卒島郷の発展にとって、何らかの契機となった出来事を反映するもので、この時期に著しい展開があった可能性が考えられる。あるいは散村から集村への動きが、南北朝期頃に活発化したことも予想されるが、これ以上は想像の域を脱することは出来ない。もともと中世初頭には周辺の湧水のみで出発した村落が、その後には強大な権力を持つ小山氏の下で用排水路を開削し、その流路に応じて水田を開き、わずかな微高地に屋敷と畠地とを設けて、小規模な村落を営んでいたが、やがて中世後期には、集村化への道を歩み始め、近世初頭には戦国期に築かれた卒島城を集落化し、その間に用排水路も整備して、村高1,600余石にも及ぶ大村となったのが、卒島郷の小史の概略であった、と見做してよいだろう。

## 6. 乾田低地型の村々

こうした卒島郷のような村落景観を有する村々は、広く思川水系の低地に展開していた、と考えることができる。もちろん思川低地のうちでも、北部と南部では多少様子も異なり、場所によってはしばしば水害を受けたり、湧水が自由にならずに、思川や巴波川からの引水を行っていた村々も存在したが、基本的には用排水路を築いて比較的安定的な水田を確保し得た村が多かった。しかも乾田であるため、湿田特有の淡水漁業の存在は想定し得ないが、二毛作にも適し、水田の総合的な生産力は、湿田のそれをはるかに上回るものであった。その意味では、関東平野中央部以南の湿田低地型の場合とは、全く対照的な村落景観を有しており、乾田低地型とも呼ぶべき類型を設定することが可能となる。

この卒島郷付近の村々は、ほとんど同様な地形条件に恵まれていたが、同じ思川低地でも北部の村々と、近世初頭の耕地状況を比較したのが表3である。これで見ると、かつて下野国府のあった栃木市田村や国府では、近世初頭においても水田率は極めて低く、耕地のほとんどが畠地であったことが分かる。これは旧稿で検討したように<sup>(36)</sup>、湿田低地型のうち特に赤岩郷と同じような傾向を示し、平地の自然堤防上の中世村落では、想像以上に水田の確保が難しかったことを物語っている。ただし下田率においては、乾田低地型では低く湿田低地型では高い、という傾向があり、

思川流域の乾燥した低地では水田の地味に恵まれたが、中川流域のような湿性の強い低地では、水吐けが悪いため下田や下々田が多かったことになる。

これは近世以前においては、思川低地のように湧水点を有する場合でも、微妙な引水に関わる地形条件の相違によって、水田の設定が難しいという状況も、部分的には有り得たため、と推定される。おそらく思川低地北部では、湧水は存在したものの、地域的には引水が不可能で、水田の設定が難しいために水田率が低下したものと思われる。しかし湿田低地の場合とは異なり、畠地の開発は比較的容易であったことが想像される。実際に表3の作成に用いた検地帳の記載から<sup>(37)</sup>、畠地の内容を見れば、国府村が上畠11町8反余・中畠17町2反余・下畠24町4反余、田村が上畠14町5反余・中畠16町9反余・下畠21町9反余、寄居村が上畠16町7反余・中畠7町8反余・下畠6町1反余で、いずれの村にも下々畠は全く存在せず、畠地の地味は比較的良好であった。すなわち思川低地北部の中世村落においては、畠地の利用がかなり盛んで、その比重には極めて高いものがあつた、と考へてよいだろう。

これに対して同じく近世初頭でも、卒島郷をはじめとする思川低地中央部の村々では、いずれも水田率が極めて高く、最も低い下石塚村でも71パーセントに達しており、ここには一面の水田地帯が出現していたことになる。しかも下田率はほぼ50パーセント前後で、下田・下々田が全水田に占める比率は、当時の関東平野の村落としては、決して悪いものではなかつた。むしろ水田の確保状況からすれば、関東平野の中世村落としては、非常に優秀な耕地に恵まれており、生産力的には極めて高水準にあつたことになる。

さらに表3の田畠および合計の各欄の右の部分には、慶長期を100とする指数を表示したが、これを中心に近世における開発について見てみよう。最も特徴的なのは初田村で、わずか2年の間に40パーセントの伸びを示しているが、下国府塚村では畠地の開発が進んだものの、水田にはほとんど変化がないことが分かる。なお卒島村の伸び率も少ないが、これは卒島村のうちの今里が元和5年(1619)に宇都宮藩領となつたためと考へられる。これを村高で見れば、『慶安郷帳』では、今里村は256石余であつたが、同じく卒島村は1,443石余、『元禄郷帳』以後はほぼ1,627石余で変化なく、その指数は113となる。また下石塚村は、慶長から『慶安郷帳』までは651石余、その後『元禄郷帳』776石余・『天保郷帳』878石余となつており、元禄との比較で118、天保とで135という指数が得られる<sup>(38)</sup>。

もちろん耕地面積と石高では計算の値に若干のズレが生じるほか、検地の実施基準の問題もあつて、単純に数値を鵜呑みにはできないが、近世初頭における耕地の開発は、初田村の例を除けば極端な増加はなかつた、と考へてよいだろう。このことは逆にいえば、良好な地形条件に恵まれた思川低地中央部では、ほとんど中世末期までに、その開発が極大値に近い状況に達していたことになる。せいぜい近世における耕地増加は、10~20パーセント程度に過ぎず、思川低地中央部の村々は面積的には、中世にかなりの開発が進行していたものと思われる。先に図2で、かなり網羅的に張り巡らされた近世の用水網を見たが、こうした水利条件が粗放的ではあれ、ある程度は中世に整備されていた、と考へなければならぬ。従つて、このような水利体系が、何時の時期に整えられたか、という問題が重要となるが、その確定はほとんど不可能というべきだろう。

ただ限られた範囲内での推論を述べれば、下野国府や国司館「介ノ館」および府中(守護所)の位置が手がかりとなろう。思川低地北部の栃木市大宮町・国府町・総社町に、湧水点が多かつたことは、この地域に古代および中世初期の国府が存在したと無関係では有り得ない。もちろん先に指摘したように、思川低地北部の地域は、近世初頭に水田率の低い村が多かつたが、古代の茫洋たる関東平野の状況を想定すれば、決して耕地状況に恵まれないわけではなかつた。思川東岸の台地部には巨大な古墳群が並んでおり、豊富な湧水点を有する乾燥した低地は、当時の水田開発には有利な地形条件にあつた。それゆゑ古代の下野国府をはじめ、中世には小山氏の国司館「介ノ館」が、この地に求められたものと思われる。

その後、中世に至って卒島郷にはほぼ南接する落嶋郷に、小山氏の国司館（＝守護所）が移ったことは、この時期に思川低地中央部の開発が、ほぼ完了していたことを意味しよう。おそらく根本私領としての小山荘の経営に全力を尽くした小山氏は、鎌倉期に本格的な開発に着手し、水田設置のための用排水路の開削を、より積極的に指導したものと思われる。利根川沿いの下総国下河辺荘の例では、鎌倉期には在地領主層の力を結集して、かなりの規模の土木工事が行われており<sup>(39)</sup>、下野国の在庁官人として巨大な影響力を発揮した小山氏が、こうした開発事業を実施した可能性は十分に考えられる。

しかも旧稿で指摘したように<sup>(40)</sup>、利根川や多摩川から取水する用水路の設置も鎌倉期に試みられているが、思川低地の場合は、より安易に得られる湧水が豊富なため、これを用いた水利体系を整備すればよかった。しかも、その長さも10数キロメートル程度で済むため、水田開発工事はかなりの実績を挙げたものと思われる。これを直接に裏付ける史料はないが、服部氏が指摘するように<sup>(41)</sup>、地頭の直営田である「御正作」が、卒島の西北部に位置し、唯一の付近の湧水であった高谷村の赤井戸の水掛りを受ける地域ではなかった、という点に注目する必要があるだろう。もし、この地点に良質な水田があったとするなら、現在の赤淵用水の鎌倉期における存在を想定せざるを得ないことになる。

おそらく卒島郷や落嶋郷の水田開発は、少なくとも鎌倉期にまで遡るもので、この地に用排水路を設定することで、小山氏は自らの所領の生産力を高めた。そうした思川低地中央部での開発の進展を踏まえた上で、小山氏は国司館（＝守護所）をこの地に移し、ここを府中として自らの政務の中心地としたのであろう。それゆえ全国を布教して歩いた時宗二世・真教も、これに近い卒島郷の新善光寺に足を留め、小山氏に関連した塩沢入道などに説法を行ったと考えられる。いずれにしても、思川低地中央部の水田開発は、中世に始り鎌倉期には一定の生産力的な成果を挙げ得たものと思われる。関東平野のうちでも、最も優秀な耕地群を抱えた思川流域には、すでに中世に乾田低地型の村落が出現しており、比較的安定的な村落経営が行われていた、と見做してよいだろう。

## 7. お わ り に

以上のような卒島郷の分析を通じて、関東平野の沖積低地には、湧水を有して乾田経営を行い得るような、乾田低地型の村落景観が存在することが明らかとなった。これまで自然堤防型に関しては、湿田低地型をイメージして来たが、沖積低地湧水地帯の乾田低地型と、沖積低地悪水地帯の湿田低地型とに区分し、人工堤防型については、原則的に沖積低地悪水地帯に設けられたものと考えた。そこで、従来の中世村落の景観類型について再分類を試み、以下のように修正することとしたい。

### I：山麓湧水地帯

- ①山麓型……………常陸国真壁郡長岡郷、上野国新田淵新田荘・淵名荘、下野国足利荘

### II：洪積台地湧水地帯

- ②深い谷田型……………下総国葛飾郡八木郷、同印旛郡結縁寺村・大森郷、同香取郡小野村など

### ③浅い谷田型

- (a)浅くて広い谷田型……………下総国結城郡毛呂郷、同下河辺荘大野郷、常陸国真壁郡竹来郷、下野国都賀郡乙女郷

- (b)浅くて狭い谷田型……………常陸国真壁郡推火郷宮山村

## Ⅲ：洪積台地無湧水地帯

④低台地型……………下総国猿島郡若林村（猿島台地の村々）

## Ⅳ：沖積低地湧水地帯

⑤乾田低地型……………下野国都賀郡卒島村（思川低地の村々）

## Ⅴ：沖積低地悪水地帯

⑥湿田低地型……………武蔵国埼玉郡正能村、下総国下河辺荘赤岩郷

⑦人工堤防型……………下総国下河辺荘高野郷

## 注

- (01) 拙稿「中世の村落景観」（木村礎編『村落景観の史的研究』八木書店、1988、以下拙稿Ⅰと略記）同「中世における村落の景観と生活」（『歴史学研究』613号所収、歴史学研究会、1990、以下拙稿Ⅱと略記）同「中世における村落の景観・補考」（『札幌大学女子短期大学部紀要』17号所収、札幌大学女子短期大学部、1991、以下拙稿Ⅲと略記）
- (02) 峰岸純夫「政治支配と地域—東国を中心に—」（木村礎他編『日本村落史講座 第一巻 総論』所収、雄山閣出版、1992）
- (03) 『小山市史 通史編Ⅰ 自然 原始・古代 中世』（小山市、1974）8頁第3図より作成
- (04) 拙稿「中世の村落景観と小地域観念—下総国結城郡金沢称名寺領毛呂郷を中心として—」（『歴史と文化』5所収、栃木県歴史文化研究会、1996、以下拙稿Ⅳと略記）
- (05) 以下、考古学上の遺跡に関しては、『小山市史 史料編 原始古代』（小山市、1981）による。
- (06) 小山文書（『小山市史 史料編 中世』所収、小山市、1980）
- (07) 小川信「下野の国府と府中について」（『栃木史学』2号所収、国学院大学栃木短期大学史学会、1988）
- (08) 峰岸純夫「遺跡発掘調査の進展と中世史研究—下野小山の都市領域を素材として」（『歴史評論』500号所収、歴史科学協議会、1991）
- (09) 市村高男「戦国時代の小山」（『小山市史 通史編Ⅰ 自然 原始・古代 中世』中世編第3章、小山市、1984）
- (10) 大橋稔氏所蔵文書（『小山市史 史料編 中世』所収、同前）
- (11) 注（09）の市村論文
- (12) 栃木県庁採集文書（『小山市史 史料編 中世』所収、同前）
- (13) 穴八幡神社文書（『小山市史 史料編 中世』所収、同前）
- (14) 小山市卒島：稲葉友好家文書
- (15) 佐八文書（『小山市史 史料編 中世』所収、同前）
- (16) 大出善作家文書（『小山市史 史料編 近世Ⅰ』所収、小山市、1982）
- (17) 『一遍上人縁起』（鷲尾順敬編『国文東方仏教叢書』第1輯第5巻 伝記部上 所収、1925、名著普及会覆刻版、1992）
- (18) 『他阿上人法語』（『時宗全書』2所収、芸林舎覆刻版、1974）
- (19) 『他阿上人歌集』（『高僧名著全集』第18巻所収、平凡社、1931）
- (20) 湯山学「『他阿上人法語』に見える武士（二）」（『時宗研究』64号所収、時宗文化研究所、1975）
- (21) 服部英雄「みそさく考」（同氏『景観にさぐる中世』所収、新人物往来社、1995）
- (22) 西念寺文書（『小山市史 史料編 近世Ⅰ』所収、同前）
- (23) 小山市卒島：稲葉友好家文書
- (24) 注（09）の市村論文
- (25) 注（09）の市村論文
- (26) 木村礎編『旧高旧領取調帳 関東編』（日本史料選書、近藤出版社、1969）
- (27) 稲葉家文書（『小山市史 史料編 近世Ⅰ』所収、同前）
- (28) 小山市卒島：稲葉友好家文書
- (29) 小山市卒島：稲葉友好家文書

- (30) 小山市卒島：稲葉友好家文書
- (31) 『小山市史 史料編 原始古代』（小山市、同前）978 頁第33図より作成
- (32) 注（21）の服部論文
- (33) 拙稿「利根川旧下流域における荘園の村落景観と生活」（『金沢文庫研究』291号 所収、神奈川県立金沢文庫、1993、以下拙稿Ⅴと略記）および注（01）の拙稿Ⅰ・Ⅱ
- (34) 小山市卒島：稲葉友好家文書
- (35) 小山市卒島：稲葉友好家文書
- (36) 注（33）の拙稿Ⅴ
- (37) 栃木市国府町：島田家文書・同田村町：大山家文書・同寄居町：飯塚家文書（『栃木市史 史料編 近世』所収、栃木市、1986）なお表3に関しては、この他に『小山市史 史料編 近世1』および村上直監修・白川部達夫編『下野国近世初期文書集成 第1巻』（文献出版、1986）のほか、小山市立博物館所蔵の写真版を参照した。
- (38) 各郷帳の数値に関しては、角川日本地名大辞典編纂委員会編『角川日本地名大辞典 第9巻 栃木県』（角川書店、1984）および下中邦彦編『日本歴史地名大系 第9巻 栃木県の地名』（平凡社、1988）に拠った。
- (39) 注（01）の拙稿Ⅰ・Ⅱおよび注（33）の拙稿Ⅴ
- (40) 注（39）に同じ
- (41) 注（21）の服部論文

謝辞：本稿を草するにあたって、史料の閲覧を快諾された小山市卒島の稲葉友好氏、いろいろと御教示戴いた小山市立博物館の平田輝明氏、同じく栃木市教育委員会の木村等氏と栃木市役所勤務の旧友・福田克己氏、史料の分析を助けてくれた酒井麻子氏の各氏に大変御世話になった。記して感謝の意を表したい。なお、この度本学を退職される内田実先生と山内孝郎先生には、小生の本学赴任以来、公私共に大変お世話になった。両先生の今後の御健康と一層の御活躍をお祈りしたい。

（1996年9月24日脱稿：はらだ・のぶを）